
ポケットモンスターBW 『記憶』

鬼狐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスターBW 『記憶』

【Nコード】

N3226Q

【作者名】

鬼狐

【あらすじ】

イッシュ地方のサンヨウシティに住む主人公、コノハはある時、目が覚めたらポケモンセンターで眠っていて、体がゾロアークになっ
ていて……！？

プロローグ

私は、走っていた。

私のモンスターボールを抱えながら。

私は、小さな森を走っていた。

後ろから追手の声が聞こえる。

それに、さっきより追手の声が大きく聞こえる気がする。

もう逃げられない。

そう思い、少し大きめの木のかげに隠れた。

隠れきれないとは思えない。

その時、私は自分の鞆に入っているあるものを思い出した。

急いで、自分の鞆をあさる。

そして、見つけた。

そのあるものとは、一つの“瓶”だ。

中には、血と思わせるような紅い液体が入っている。

私は、その瓶の蓋を取ると投げるように地面に置いた。

そして、紅い液体を一気に飲み込む。

「うっ……!!」

飲み干したその時、身体に異変が起きた。

身体に炎で焼かれるような熱さが襲った。

「ああああああああああああ!!」

そのまま私は、意識を失った。

プロローグ（後書き）

はい。短いです。

第1話に続きます。

第1話 『謎と狐と白竜と鳥』 (前書き)

サブタイトル変かな？

第1話 『謎と狐と白竜と鳥』

『お……き……』

ん…？ 誰かが呼んでる？

『起き……ノハ……』

なんて言ってるんだろう？ ハッキリ聞き取れない。
てゆーか、誰？

『早く起きろおおお！！』

バシシイイイン！

『ぎゃあああああ！！』

乾いた音と共に、頬に激痛があー！！
ぐはああ！ めざましビンタかあああ！

『お、おのれええ！』

『…何言ってるんだ？ お前』

てか！ さっきからこの声誰よ！？

私は、ゆっくりと目を開けた。そして、一番最初に目が入ったのは、赤と黒の体に白い鶏冠をもつ鷺のようなポケモン、ゆうもうポケモンのウォーグルが目につつた。

てゆーか、私の手持ちのウォーグルだ。
そして、ちょー至近距離。顔近い!!

『ぎゃあああああ!!』

『いきなり人の顔見て叫ぶなあああ!!』

『いや、ウォーグル。あんた人間じゃないでしょ』

『あ、そっか』

『まったく、バガが!!』

『心配してやってんのに! なんだその態度は!!』

その時、ふと気づいた。

……あれえー? 今、私って、ウォーグルと喋^{こいっ}ってるの?
どーゆーこと?

『おーい、どーしたー?』

ウォーグルが、キョトンとしている私の目の前で、翼を振る。

『……しゃ……』

『しゃ?』

『喋^{こいっ}ってるうううううう!!』

『……はあ?』

『な、ななななななんであんたが喋ってんの!!?』

『喋って悪いか!!』

『悪いわ!!』

『何故!?!』

あー、これは夢だ。うん。悪い夢だ。頬の部分を両側からパチンと叩く。勿論、激痛が頬を襲う。

『ぐおおおおおお!!』

『何馬鹿な事やってんだ?』

これは、夢ではないのか!?

この時、自分の体の違和感に気づく。
体が濃灰の毛に覆われている。

『……!!』

私は、急いで体を見回す。

四肢はほっそりとし鋭い爪が伸びていて、頭からは黒交じりの赤い大きな鬣が伸びており、末端部でリングのようなもので束ねられている。うん。知ってるこのポケモン。

ばけぎつねポケモンのゾロアークだね。

『……………。』

『……………』

『……………な……………』

『な？』

『なんじゃこりゃあああああああああああ！！！！』

『なんつー声出すんだああ！！』

そんなん知らんがな。

『な、なんで私が、ゾロアークになってんのよ！？』

『そんなん知らんがな。』

意味分からんよ、ワトソン君！

そんな時。

ガチャ

「もしかして、目が覚めた？」

すると、白髪で瞳の色が青色の少年が部屋に入ってきた。

『あの…どちらさん？』

「えーっと、僕はアキラだよ。泉^{いずみ} 晶^{あきら}だよ」

そんなこと聞きたいんじゃないよ。

『いや、そーじゃなくてあんたが何者なのかが知りたいの』

「僕は、君を助けたんだよ？」

は？ 助けた？ 私を？

『そうだったの？』

「そーだよ。君が“夢の跡地”の近くの森で倒れてたから」

『へえ、そうだったの。じゃあ、お礼は言っとく。ありがとう』

「どーいたしまして」

白髪少年A改めアキラは、ニコツと笑いながら言った。

でも、倒れてた？ そんな記憶は無い。

てゆーか、あれ？ 色々思い出せないではないか。“夢の跡地”で何があったのか思い出せない。

……あっ！ アキラは、倒れてた（記憶が無い）私を助けたのなら、どーして私がゾロアークになったのかわかるかもしれない。

『ねえ、アキラ』

「はい？」

『実は…』

私は、自分が元人間ということ、倒れてた少し前の記憶が無いこととかのことを話した。

『…で、なにか知らない？』

「うーん、別に。君を見つけたときは、もうゾロアークだったからね」

『やっぱり、そうなんだ』

私は、ガツクリと項垂れた。コンチキショー…。

「でも、なんだか似てる」

『はい？』

「いや、僕と君が」

『だから、何が言いたいのか？』

「僕も、元人間でポケモンだから」

『はい？』

「えーと、ちょっとまってて」

と、アキラが言う私から距離を離し、身体に力をいれだした。

「ふうー」

すると、アキラの体が風を纏い始めた。

……なんじゃこりゃ？ 何が起るんだべ？

次第に風の強さが強くなり、目が開けれなくなって目を瞑った。それから、数秒後に風がおさまり目を開けれるようになった。

ゆっくりと目を開けると、そこにいたのは、純白の体と腕と一体になった巨大な翼を持っていて尾部はジェットエンジンのようになっている二足歩行のドラゴンのような外見のはくようポケモンのレシラムがいた。

「ほらね♪」

と、レシラムが微笑みながら言う。

「ほらね♪」じゃねえ。

『えーっと、アキラだよね？』

恐る恐る尋ねる。

「アキラだよ」

『……さいですか』

どーやら、このレシラムがアキラのようです。はい。

「まあ、こんな感じで僕はレシラムだよ」

『しつもん』

私は、手を上げて言う。

「何？」

『状況がはっきりわかりません』

「僕もよくわからない」

『じゃあ、質問していくから順に答えてね』

「うん」

『アキラは、元人間で今はレシラムなんだよね』

「うん」

『じゃあ、何でレシラムになったの？』

「分からないけど、小さい頃に綺麗な石を拾ったらこんな姿になった」

……よくわからん。が、とりあえずスルー。

『じゃあ、何で人間になれたの？』

何で人間の姿をしてるんだ君は。レシラムじゃないのか。

「分からないけどー」

またかよ。

「伝説のポケモンだからかな？」

…こいつ殴っていいかな？

「とりあえず、僕もよく分からないんだよ」

『……じゃあ、最後の質問。何で、人間の言葉が喋れるの？』

そう、さっきから私が喋ってるのは、ゾロアークの言葉つまりポケモンの言葉である。

だから、さっきから、私の「が」になってたわけよ。

「えーっと、伝説のポケモン『いーかげんにしなさい！』へぶっ！」

ついに、殴ってやった。

こいつ、使えねー。

「何で殴るの？」

殴られた所をさすりながら涙目で言う。

レシラムが涙目って……なんか、かわいい。……じゃなくて。

『あんた、さっきからテキトー過ぎ！』

「そんなこと言ったってえ」

『問答無用！』

それから、長々とアキラに説教をしてやった。

第1話 『謎と狐と白竜と鳥』 (後書き)

にしても、グダグダだなー。

ヘタレ (アキラ) も意味わからないし W W W

ヘタレ (アキラ) 「そんなこと言ってもお (泣) 」

ヘタレ 予定キャラは黙っとけ。

またいつか編集しなければ！

第2話 『狐と白竜と跡地と地下とプラズマと旅立ち』 (前書き)

えーっと、コトハの名前を“コノハ”に変えました。

コノハ「なんで？批判でもあったの？」

いや、批判じゃないけど、色々あったんだ。

コノハ「それではどーぞ！」

スルーかよ！？

第2話 『狐と白竜と跡地と地下とプラズマと旅立ち』

あれこれ二時間ぐらい説教してたようです。

今、私の目の前にいるエグエグ泣いているレシラムことアキラをどーするべきか…。

てゆうか、レシラムってもっとカッコイイ感じがするんだけど…でも、かわいい。

『とりあえず、涙拭け』

と、ウォーグルがアキラにティッシュの箱を投げる。
投げちゃうの!?

パコオン（↑ティッシュの箱が顔面にぶつかる音）

『キャッチ……できるだろ…』

『じゃあ何で投げたの?』

つまりこーゆうことだよ。

ウォーグルが箱を投げる↓アキラがキャッチ失敗↓顔面直撃。以上。

……………。

『てゆうか、ウォーグルいたの?!』

『いたわ! ずつつといたわ!! 前回の話の後半からずっと空気

みたいだったけどな!!」

『ウォーグル、その発言で台無しよ?』

「なんグスツ、で僕、ヒック、がこんなグスツ、ことに:」

いつの間にか人間の姿に戻っていたアキラが途切れ途切れで言う。
そこまで泣くの?

『ドンマイ』

『いや、お前が説教したからだろ』

『あんただって、箱投げたじゃない』

『……………。』

『……………。』

……………どーしよっかこの空気。

『と、とりあえず、アキラは私を“夢の跡地”辺りで見つけたんだ
よね?』

「……………うん。そーだよ」

うわ、テンション低ッ!

流石にここまでやられたらテンションガタ落ちだよね。

『今度何か奢るから、機嫌直して、ね?』

『いやいや、それでいいのか?』

そーですよー。なにかいい手h

「……うん。分かった」

うん。良い返事だ。

って、えゝええええええー！ー！！

『いいのかよ……』

ウオーグルも唾然としている。

『子どもっぼさが……』

何才なわけ?

『お前何才なんだ?』

私の疑問をウオーグルがアキラにぶつけた。

「14才だよ。作者さんと同じ年だよ!」

『作者のことなんてどーでもいいよ』

(´・ω・｀) ショボーン by 作者

『なんか出た!?』

「気にしたら負けって奴じゃない♪」

『いつの間にか上機嫌になってるよ。こいつ』

まあ、そんなのは、ほっというて……。

『じゃあ、その場所に行ってみよう?』

「でも、今コノハは、安静についてジョーイさんにいわれてたよ?」

ジョーイさんって、ココってポケモンセンターなんだ。

まったく気にしてなかったな!。

……あれ?

『てゆーか、何で私の名前知ってるの?』

「ウォーグルに教えてもらった」

おいおい、何勝手に教えてくれてんだ? プライバシーだよ?

「とりあえず、行くのは明日だよ?」

『はーい』

と、子供のような返事をした。

そして、アキラが部屋から出ていった。

ウォーグルもいつの間にかモンスターボールの中に戻っていた。



翌日。

私は、無事に退院できた。まあ、それは良しとして……。何で私がアキラのポケモンという設定になってたわけ!?

「仕方ないよ。コノハを連れてきたのは僕なんだからね。そう思われてもおかしくないと思うけど」

むう。

「ところで、昨日の夜にコノハの部屋から奇声が聞こえたけど、何あれ?」

うつ……。聞かれてたんだ……。でも、変な声って酷くない?

「ただの発声練習だけど? 人間の声のね」

「本当だ!」

ふふふ、一晩でこれだけできる私ってある意味すごい? ……ごめんなさい。調子にのっちゃいました。だからそんな目で見ないでえ!

「それじゃあ、行こうか」

私は頷いた。

さっきいたポケモンセンターは、サンヨウシティのポケモンセン

ターだったので、すぐに目的地についた。

「ここが“夢の跡地”かぁ……」

私の目の前に広がっていた光景は、何かの建物だったもの。だが、その建物は、あまり原型をとどめていない。

「何かの工場だったのかな？」

「あっ！ コノハ！ こっちこっち！」

すると、アキラが手招きしながら私を呼んだ。

「何？」

「この木の近くにコノハが、倒れてたんだ」

アキラが一本の木を指さしながら言う。

「へえ。これがねー」

私は、この木に何か手がかり的な何かあるのではないか、と思い辺りを探った。

すると、何か見つけた。

『瓶』だ。

「なんだろう？ この瓶」

なにか、葉でも入ってたのかな、と思い匂いを嗅いでみるが何の

匂いもしない。無臭だった。

とりあえず、その瓶の蓋らしきものも見つけ瓶と蓋をバッグにしまった。なにかありそうだからね。

『おーい。二人ともー』

と、ウォーグルがこちらに飛んできた。

実は、コイツには“夢の跡地”に何かあるかもしれない、ということとで搜索させてた。

露骨に嫌そうな顔してたが、そんなの関係ない。

『なんか、地下への入り口みたいなものを見つけたぞ』

ウォーグルが、翼の先である方向をさしながら言う。うむ、ごくろう。

「それじゃあ、行ってみよっか。何かあるかもしれないし」

と、私が言うと、ウォーグルがその入り口のある方向に飛んでいく。そして、私たちはその後を追っていった。



「うわあ、真っ暗」

ただいま私たちは、その地下に行くための階段を降りている。辺りは真っ暗で、何も見えない。

「足下気をつけなさいよー」

とりあえず、忠告しておくけど……

「大丈夫大丈夫」

ズルッ

何か滑るような音が聞こえた。

そして、アキラの悲鳴。

転けたな：アイツ。ついで言っておくけど、アイツが先頭だったから私に被害はない。

と、階段を降りきったようだ。足の感覚でわかった。だとすると、この足下近くにアイツがいるわけね。

「おーい、アキラー！いたら返事はー？」

大声で言う必要なかったかな？

すると、いきなり目の前が明るくなった。

私は、手で目を覆う。

何っ！？ 何が起こったの？！

私は、徐々に目を覆っていた手を放していく。

そして、目の前に現れたのは、頭部にはアンテナのような突起があり、本体はオレンジ色で小さな本体の周囲に青白い電流を纏っていて、手足はないが、本体周囲の電流の一部が手のように伸びてい

るプラズマポケモンのロトムだ。

辺りを見渡せば、他には人影はない。あ、足下にアキラが倒れている。

アキラの横には、モンスターボールが落ちている。まさかこのロトムって……

『君がコノハちゃんかー！　こんにちは☆』

「ど、どうも……」

すごく気さくだ……。

まあ、こっちの方が話しやすいけどね。

「えっと、アキラの手持ちの……」

『おう！　俺は、このアキラの手持ちだZE☆　いきなりボールから放り出されたと思ったら目の前真っ暗でさー☆　だから、“フラッシュ”で周りをみえるようしんだZE☆』

なるほど。だから、明るくなったんだ。

てゆーか、くだZEとか語尾に☆って……。

「うう……なんでこんなことに……」

あっ、起きた。

アキラが起き上がった。少し目が潤んでるような……。見ないでおいてあげよう。

『おー、大丈夫か？　相変わらずよく転ぶなあ☆』

あの、ロトム：語尾に☆付けるのやめたげて？

「それほどでもないけどね」

「褒めてねーよ。誰も褒めてねーよ」

「ええっ!？」

何で機嫌良くなった？ 何でそんなに驚く？ マ○オさんか？

「もうツツコミやめていい?」

『だが断る』

二人（一匹と一人だけどね）は、息ピッタリで言った。
……さいですか。

とりあえず、このままじゃあ拉致があかん。

私は、周りを見渡した。

周りには、いくつものコンピューターが置いてあった。が、人間は誰もいない。

だけど、驚いたのは、その置いてあったたくさんのコンピューターではなかった。

「うわあ、凄い数の機械だね」

「それじゃあ、調査再開しよっか。ロトム」

私は、ロトムを呼んだ。

「あんたって、機械の中とかに入れるんでしょ？ちょっと、機械の中に入って色々調べてくれない？」

『合点だ☆』

すると、ロトムがスゥーと機械の中に入っていった。スゥーとね。

「…さて、アキラも何かないか探してよ？」

「合点だ☆」

「ロトムみたいに言うな」

それから、私たちは周りに何かないか探しだした。



それから、数分後にロトムがスゥーと機械から出てきた。スゥーと。

「で？何かデータ残ってた？」

多分無いと思うけどね。

『あー、そのことなんだけどな……全部消されてた☆』

「☆付けて言うことじゃないでしょ」

やっぱり、予想通りね。

「はい！」

と、アキラが手を上げながら、言った。生徒のマネっすか？

『なんでしょうアキラくん？』

ロトムが先生役かい！？

「ここにずっといてたら誰かが来るんじゃないかなー、なんて…」

「いや、それはないと思うけどね」

「えっ、そうなの？」

いや、だって…

「この大量の機械のデータは、消されているけど、多分何かのディスクとかにデータを移し変えて消したんだと思う。それに…」

「それに？」

「これを見てみて」

私は、一つのパソコンを指さした。

『これがどうしたんだ？』

「普通のパソコンだけどね？」

アキラたちは、パソコンを凝視する。
そこまで見るかな？

「いや、見るのはパソコンじゃないよ。その周りのホコリだけど」

「ホコリ？」

アキラたちは、再び凝視する。
ガン見することないのに……。

『あっ☆』

ロトムが何か見つけたようで、声を上げた。
あんたが先にみつけちゃったんだ。

「あっ！ ……全然わかんない」

ええっ？ じゃあなんで「あっ！」って言った？？ わからないの？？？

『アキラ、ちゃんと見ろ☆全然ホコリかぶってないだろ？』

「ああーっ！」

そう、実はこの機械とかにはホコリが、あまりかぶってなかったのだ。

「つまり、少し前には、ここを使っていたってことだから、すぐに

帰って来ることはないと思う」

「おお！　なんだか探偵みたい！」

アキラが、パチパチと拍手をする。

『いや、誰でも分かることだろ、あれ☆』

ロトムの言った言葉が正論だと思う。

「とりあえず、もうちょっと、調べてみよう」

「おおー！！」



結果、何もなかった。

「なーんにもなかったねー」

「もう、どーしよっかな、この体」

どーすることも出来ないけどね。

「じゃあさじゃあさ、僕と旅しない？」

なん…だと…？

いや、別にいやという訳でもない。

逆にその方が、私が人間に戻る方法がわかるかもしれない。

だけどね、アキラと一緒にだと色々やバイんじゃないの？ だって、天然なヘタレだよ？

「……まあ、でもいいかな」

「ほえ？」

私は、アキラに手をスツと差し出す。

すると、アキラは、微笑んで私の手をとった。

「よろしく」

「うん！ よろしく！」

こうして、二人の旅が始m……あれ？でも、私って今ポケモンだから、一匹と一人かな？でも、アキラはレシラムだから二匹？でも私って、元人間だから……。

と、とりあえず、二人の旅が始まった。

第3話 『狐と白竜と洞窟と黒ずくめと長魚とV』 (前書き)

タイトルは気にすんなWWW

第3話 『狐と白竜と洞窟と黒ずくめと長魚とV』

「やっぱり変じゃないかな？」

私は、今の自分の格好を見ながら言う。

腰にはモンスターボールの付いたベルト、肩には人間だった時に使っていた鞆を掛けてある。

そして何より、自分が今、ゾロアークであること。

「え？　そうかな？　僕はそう見えないけど」

「そう？」

「うん。だって、ゾロアークが人間に似た格好してるようにしか見えないもん」

…うん。それを変じゃないか？　って聞いてるんだよ？

只今、アキラと共に旅を開始したわけだけど、現在地はサンヨウシテイの近くの洞窟、“地下水脈の穴”の前にいる。

なんでそんな場所にいるのかというと、数分前にこの洞窟に黒ずくめの男二名が入っていくのを目撃したからである。

簡単に言えば、好奇心に負けて、彼らが何をしようとしているのか知りたいだけなのである。

だって、全身黒ずくめだよ！？　気になるじゃん！

「突入ーっ！」

私は、“地下水脈の穴”に文字通り突入した。
後ろから「あっ、ちょ、待って!」というアキラの声が聞こえた
けど、完全無視。



「うわぁ、予想以上に暗いなぁ」

「じゃぁ、ロトムに頼む?」

「いや、“フラッシュ”したら気づかれるかも知れないじゃん」

「あ、そっか」

……大丈夫だろうか?

進んで行くと人の気配がして、こっそり岩から隠れながらその方
を見たら、いた——っ!

「何か喋ってるみたいだね」

「うん。うまく聞きとれないけど」

もう少しだけ近寄ってみようか?
その考えが間違いだった。



どうも、コノハです。

只今、黒ずくめの男達と絶賛対峙中なう。
え？　なんで、そんなことになったかって？

ちよつと整理しながらしよう。

私がコッソリ近づこうとする↓足で石を蹴ってしまった↓「誰だ
！」↓現在に至る。

ちよつと省いたけれど、ハッキリ自業自得なんですけどねー。

「何者だ、お前ら」

黒ずくめの男Aがサングラス越しに睨みながら言った。
あんたこそ何者だよ。

「えつと、僕たちは、黒ずくめの二人が怪しかったから付いてきた
んだよね？」

馬鹿正直に答えやがったあ！　しかも、私に聞くな。

「…な、なるほどな」

黒ずくめの男Bが言った。若干呆れてる！

「まあ、俺たちを追ってきたなら、生かしておくわけにはいかないな」

黒ずくめAは、そう言うともンスターボールを構えた。黒ずくめBも同じく構える。

……やっぱりこうなりますよねー。

「行け、アリアドス」

「やれ！ ゴースト」

相手が出てきたのは、あしながポケモンのアリアドスとガスじようポケモンのゴーストを出してきた。

見た目通りのポケモン出してくるようみたい。

「じゃあ、僕たちも戦うよね？」

『訊くまでもないでしょ？』

そう言いながら私は、もンスターボールを構えた。

一応声は、ポケモンの声に戻しておいた。まあ、喋ってたらヤバイことになりそうだし。

「じゃあ、僕も」

アキラは、もンスターボールから自分のポケモンを繰り出した。細長い体躯の上半身は肌色をしており、下半身はステンドグラスのようなツートンカラーの虹色の鱗を持っていて、頭には二対になったリングのような赤い触覚と、同色のおさげ髪のようなものが伸

びているいつくしみポケモンのミロカロスだった。

……………。

……………はい？

「ティフル！ ガツンと行くよ！」

アキラがガッツポーズのようなポーズをしながら言う。

『フフツ、「ガツン」とですね。わかりました』

なんてこったい。アキラがミロカロスを持ってたなんて。

『貴方が、コノハちゃんね？』

突然の事で私は少しテンパってしまった。

『え、あ、どうもー』

『ウフフツ、結構可愛らしいですね。お持ち帰りしたいぐらい』

……………最後の言葉は聞かなかったことにしよう。うん。

私はそう思いながら、モンスターボールから自分のポケモンを繰り出した。

黄色の体にオレンジの巨大なV字型の耳を持ち、背に小さな羽を持っていて、勝利をもたらすポケモンといわれ、このポケモンを連れたポケモントレーナーはどんな勝負にも勝てるといわれている。体内でエネルギーを無限に生成し、そのエネルギーを触れることで

他者に分け与える能力を持つポケモン、しょうりポケモンのビクティニである。

……わかっている。ちょっと色々おかしい事に。作者のポケモンのチョイスがおかしい事に。

『空って青いね〜』

『シャイン、ここ洞窟。空見えないよ』

ビクティニのシャインは子供のような性格なのです。

『あら、貴方もかわいらしいわね。この子も、お持ち帰りしたいぐらい』

『どうも〜』

おい。

まあ、こんな感じでバトルは始まったわけだ。

第3話 『狐と白竜と洞窟と黒ずくめと長魚とV』 (後書き)

わかってます。完全チヨイス間違ってます。

空気↑「じゃあ、やめろよ」

ヤダッ！

電波くん↑(ロトム)「子供みたいだな☆ってか、電波くんってなんだ?!」

気にすんなWWW

第4話 『狐と白竜と黒い鳳凰と青い火鼠と副会長』（前書き）

更新遅れました。大変まことに申し訳ありません。

コノハ「人間国宝かってぐらいの土下座をしたら許してあげる」

無理。

第4話 『狐と白竜と黒い鳳凰と青い火鼠と副会長』

正直に言わせてもらおうと、勝負はすぐに決着がついたのだ。

『シャイン、“煉獄”!』

『ていつ♪』

『あんぎゃああああ!!』

「あ、アリアドス!」

アリアドス、一発ケーオー。

「ティフル、“波乗り”」

『あぴゃあああ』

「ゴースト!!?」

あのゴーストの悲鳴、変じゃない?

何よ『あぴゃあああ』って……。

……まあ、そんなわけで、瞬殺だったと。

私たちは、シャインたちをボールに戻した。

「く、くそっ! こうなったら!!」

「おい! アレは試作品だぞ!!」

んむ？ 何か揉めてるなあ。

すると、黒ずくめBが、持っていたアタッシュケースを開け、中から一つのモンスターボールを取り出した。

「行けっ!!」

そのボールから飛び出したのは、通常の色とは異なった色をしているホウオウだった。

……What?

そのホウオウは、全身の色が漆黒に包まれ、紅く不気味に光った瞳がこちらを睨む。

「ええーっ!! 嘘お!!」

アキラが絶叫する。

なんでこんなものが……。

「おい、今のうちに逃げるぞっ」

「お、おうっ」

『お、ちよつと、こいつは……!!』

黒ずくめAとBは、私の言葉を見殺し、逃げ出した。
雑魚キャラかっ!

「コノハ、前っ!」

アキラの声にはっとなった。
目の前には、迫る黒いホウオウ。

「やばいッ」

私は、体を逸らしホウオウ（仮）の突撃を回避する。
まあ、黒ずくめのやつがいないし

「それでも、くらえっ！」

私は、すぐに体勢をとり直し、“悪の波動”をホウオウに放った。
技の使い方？ そんなのぶっつけ本番よ！
悪の波動は、ホウオウに直撃した。

「いよしっ！」

ホウオウは、こちらを睨みつける。
アキラは、おそらく役にたたなそうだし……。
やっぱり、シャインたちに頼むしか……。
そう思った時だった。
風に乗って、何かが私の目の前に飛んできた。

「なにこれ……腕章？」

それは。「副会長」と描かれた腕章だった。

『ちょ、ちょっと、待って〜』

アキラに似たような情け無い声がこちらに来る。
おそらく敵ではないと思う。

『はぁ…ぜえ…っ、疲れた』

その声の主は、一匹のバクフーンだった。

「誰？」

『あ、それ、俺のなんだ』

そのバクフーンは、私の手の腕章を指さした。

「あ、そうなの。はい」

私は、そのバクフーンに腕章を渡した。

バクフーンはその腕章をつけると、安堵の表情になっていた。

「ほら、さっさと逃げなよ」

『ありがとう。あ、俺の名前は、アマトっていうんだ』

「あー、うん。私は、コノハっていうんだけど、自己紹介してる暇ないでしょ？」

『でもさ、コイツを倒した方がいいんじゃないかな？　なんか変な感じだし』

そのアマトは、ホウオウに視線を向ける。

「あ？」

私は、目を丸くした。
今なんと？

『腕章拾ってくれたお礼だから』

アマトはそう言う構え。

『“火炎放射”！』

放たれた火炎放射をホウオウは、ヒラリと避け、アマトに“大文字”を放った。

『うわわわ！』

アマトは、“電光石火”で紙一重で避ける。

『あつぶないなあ、もう』

その時である。

プルルルル、と何処からか電話の着信音が聴こえてきた。

『え、あつ、もしもし』

「あんたの！？」

アマトは、何処からかポケギア（という携帯端末）を取り出し、あろうことか通話しだしたのだ。

何処から取り出したの？ 体毛！？ 体毛なの！？

そういえば、ゾロアークのこの鬘（？）に色々なものが入れれそうだなあ。

《ちょっと、アマトくん！ 午後の授業始まっちゃうよ！？》

『え、ホントに？ ヤバイッ』

アマトは、『じゃ、すぐ行くっ』と通話相手に言うと、通話を切り、ポケギアを何処かにしまった。
だから何処に！？

『それじゃあ、本気で行くかな！』

すると、アマトの炎が青い炎に変わった。

「すごい…！ 炎が変わった！？」

『そういうこと。でも、まだ使いこなせないんだ、これ』

『だから、“とどめ”はよろしく』アマトは、そう言葉を続けた。

「……うん、わかった」

私が頷くと、アマトは、ニカッと笑った。

アマトは、自分の腕に青い炎を纏わせ、姿勢を低くする。

『行くぞっ！』

アマトは、そう言うとおもいきり地面を蹴り、ハウオウのいるところまでジャンプした。

どんだけ脚力あるの？

『はああああ！』

そのまま青い炎を纏った腕で、ホウオウを叩き落とした。
今が、チャンス！

「それでも、くらいなさい！！」

私は、“ナイトバースト”をホウオウに放った。

暗黒の衝撃波にとばされたホウオウは、なんと灰と化し、消えてなくなってしまった。

『消えた……？』

アマトは、目を丸くしていた。
そういえば、さっき……。

『おい！ アレは試作品だぞ！！』

とか、なんとか言ってたけど……。
あいつらは一体……。



『それじゃあ、俺これから用事があるから』

アマトは、拳を私に突き出した。

「私は、それに、自分の拳をコツンと当てた。」

『それじゃあ、また!』

アマトは、洞窟から飛び出していった。

「ひとまず、一件落着かな」

自分がポケモンになって、初めて技をつかい、初めて戦った。それが、なんだか寂しかった。



「僕、後半完全に空気だった……」

『ドンマイ』

私が、アキラがウォーグルに慰められたことを知るのは、すぐ後だった。

第4話 『狐と白竜と黒い鳳凰と青い火鼠と副会長』（後書き）

コノハ「アマトって何者？ あの腕章とかあの電話の内容とか」

アマトの正体は、9月に投稿予定の新小説を読めばわかるぞ！

コノハ「何そのテンション…」

つまり、ゲストキャラなの彼は。

第5話 『狐と白龍と少女と博物館と』【王】と指輪（前書き）

今回もグダグダです！

コノハ「おい」

第5話 『狐と白龍と少女と博物館と【王】と指輪』

何だろうか、あの人？

それが、シッポウシティに着いて、一番最初に思ったこと。

いや、正確にいうと、その町ではなく、町の出入り口辺りをオロオロしている女の子にだ。

『……あのー…』

「ひゃいっ！」

振り返った女の子は、明らかにテンパっていた。

「ええと、どうしたんですか？」

アキラが私の代わりにその人に尋ねた。

ほら、私ゾロアークだし。

「ええとっ、実は、その、あの、こ、このコが……！」

彼女の手には、一つのモンスターボールが握られている。

そこまでテンパらなくても……。

「それで…？」

「このコが道端で、ボールと一緒にた、倒れてて……！」

「とりあえず、ポケセンに連れて行ったら？」

「あ、はい、そうですね…！」

テンパってすべきことが分からなくなった、的なの？



ポケモンセンター。

私たちは、その女の子と共にポケモンセンターに来たのだ。

ガラス越しに見える、その女の子が拾ったポケモンは、あごオノポケモンのオノノクスだ。

そのオノノクスは、絶賛治療中だが、あまり深い傷は負っていないなかつたらしい。

「……拾ったってことは、君のポケモンじゃないんだよね？」

「えっ、あ、はい。そうです……」

「じゃあ、なんで倒れてたか訊かないとね」

アキラはそういうと私の方に振り返る。

まあ、だいたい予想はついてたけどね。

『…わかった。目が覚めたら訊いてみる』

アキラは、そう聞くと「ん。わかった。…訊いてくれるってさ!」
とその女の子に言った。

『でも、何か事件の予感が……』

「えっ! 事件って…?」

『だって、道端で突然倒れてるのよ。それにボール付きで
事件の匂いがプンプンするのよ。』

「で、でも、誰かが落としたのかもしれないよ?」

『もーっ! ロマンがないわね、ロ・マ・ン!』

「ロマンって何のロマン……?」

「あのー……」

それは、私でもなければアキラでもない声。
視線を向ければ、さっきの女の子。

「もしかして、会話…できるんですか?」

……し、しまった! つい夢中に!
そこにガツクリと項垂れる私と、苦笑いするアキラと、目を丸く
する女の子の姿があった。

「そ、そんなことがあったんですか」

とりあえず、これまでの経緯を教えておいた。

私が元人間であることや、あの洞窟での戦いとか。

「うん、まー、それぐらいかな」

普通に人の言葉を使えるのはいいことだな、としみじみ思った。

「ところで、貴方の名前は？」

私の名前は、経緯を話すときに言った。

「わ、私の名前は、ナツミと言います。伊集院七海いじゅういん なつみです」

ふむ。ナツミちゃんか、しっかり覚えたぞ。

「それで、あの子が目を覚ますまで、博物館に行きませんか？」

「博物館？」

私が復唱すると、ナツミがこくり、と頷いた。

「はい、シッポウ博物館に」



今ゾロアークの私が博物館に入れるのか、という疑問はカウンターの女性に訊いたところ、ほかの方の迷惑にならないければOKと言われ、解決した。

「うわ、以外にも広いかも、この博物館」

ちなみに私は人の言葉を喋っているが、他の人に聞こえないようになるべく小声である。

「はい。色々な化石や過去の遺産、世界各国の珍しいモノが展示されています」

入って一番最初に目に入ったのは、おそらくカイリユウの骨格標本。

そして、その右側に展示されているのは、おそらくカラカラカガラガラが使用していた骨だと思う。

その近くには、まだ解読されていない文字の刻まれた石板や、昔の人々が祭りの時につけていたお面など、色々なものが展示されている。

その中で私が気になったものは。

「これは何？」

それは、古びた壁画だ。

この壁画には、二対の翼が生えた人間と、二体の黒と白のポケモンが対峙しているところが描かれている。

「それは、およそ一千年前の壁画で、マスター【王】と呼ばれた者と伝説のポケモンのレシラムとゼクロムが対峙しているところが描かれているらしいです」

「マスター【王】って何なの？」

「一千年前にこの世を支配しようとした人物です。彼は、人間の体を持ち、ポケモンの力を使えました」

なぬ！？ 人間の体なのに、ポケモンの力を使えただと？
何そのチート、羨ましい。

「じゃあ、このレシラムとゼクロムは？」

「彼らは、マスター【王】の力を利用しようとしていたらしいですよ」

ナツミちゃんは、最後に「何故、力を利用したかはわかりませんが……」と付け足した。

「……レシラム、か」

いや、でも、あいつのわけがない。

そう思いながら、先ほどから静かなアキラに振り返った。

そこにいたのは、アキラだったが、どうも様子がおかしい。顔色が悪い。

「ど、どうしたの？ 顔色が悪いわよ」

「…え、いや、なんでもないよ。ちよっと、色々な話で頭が痛くなっちゃってね……」

「まったく心配させるんじゃないわよ」

「ご、ごめん。僕、先に帰っとくね」

アキラは、そういうと出口に歩き出した。

「変なアキラ」

「あの、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫なんじゃないの。それより、これは何？」

私が指差したものは、さっきの壁画の横にあった1mぐらいある石板だった。

いや、石板より気になるのは、その石板に嵌め込まれた『指輪』だ。

その石板には、複数の指輪が三つの円の真ん中に嵌め込まれていて、ひとつだけその三つの円の真ん中に嵌め込まれていた。

指輪の数は全部で17コあり、それぞれにいろいろな色の石のようなものが埋め込まれている。黒、紫、藍色、黄色、緑、赤、青、etc.

ついでにいうと、一番真ん中に嵌め込まれた指輪は透明な石が埋

め込まれていた。

「これは、**【王】**^{マスター}が使用していたと言われている指輪です」

「へえ」

「この指輪は、人間には使えなくて、これらを持ったポケモンの力を格段に上昇させることができ、この指輪を全て使えば、世界を統べることができるらしいです」

「へえ…マジで？」

「はい。ですが、あまりに力が増えるためにそのポケモンが暴走してしまうらしいです」

「へえ…いや、駄目じゃん、使えないじゃん」

「はい。ですから、人間であって、ポケモンの力を使った**【王】**^{マスター}のみが使えたと言われていると思います」

「……………なるほど」

よくわかった。**【王】**^{マスター}はどこまでチートなんだ。
セコイ奴め。



結局、その晩もオノノクスは、ぐっすり熟睡で起きなかった。
で、私たちもポケセンで、泊ることになった。

真夜中で熟睡している私たちの一方で、シッポウ博物館では。

カタカタ、と石板が突然揺れ始めた。

だが、すぐに石板の揺れがピタリと止まった。

再び静まり返る博物館。

瞬間、嵌め込まれた指輪が発光しはじめ、石板から弾かれるようにはずれた。

そのまま空中で浮遊していた指輪は、なんと壁をすり抜け、世界のあちこちに飛んで行ってしまった。

第5話 『狐と白龍と少女と博物館と』と指輪 (後書き)

あの指輪について、おいおいわかっていくつもりです。

コノハ「あのオノノクスって何なの？」

それは次回で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3226q/>

ポケットモンスターBW 『記憶』

2011年10月7日00時36分発行